

父の化石頭

中乃森 豊

ある日の夜、父と大喧嘩した。

テニス部の憧れの先輩からかかってきた電話を私に取り次ぐことなく切っちゃったから。タイムラグが悪いことに私のスマホのバッテリーが切れていて、先輩は仕方なく家の電話にかけたらしい。普段は滅多に電話に出ない父が受話器を取っただけでも最悪なのに、その上、先輩におかっ「て」今、何時だと思っているんだ？ こんな夜遅くに子供が電話をかけてくるとは非常識じゃないか」なんてお説教までしたからもう許せなくて。

カツとなった私は思わず「もう最低！ お父さんの化石頭！」と怒鳴ってしまった。

「化石頭だど？ そりゃどういう意味だ？」

顔を真っ赤にして怒る父の顔を見ると私はむしろ気持ちが悪くて、クールに言い放った。

「古くさくてカチンコチンの頑固な石頭だから化石頭って言ったの。今どき夜の八時に友達が電話をかけてくるなんて普通だよ。それに高校生はもう子供じゃなくて立派な大人ですから」「親の脛をかじっているお前達が大人なわけないだろう！」

「お父さんの頭の中にはね、古すぎて時代遅れも甚だしい偏見や思い込みがアンモナイトや三葉虫みたいな化石になってパンパンに詰まっているのよ！」

「なんだと！」

「まあまあ二人とも、もうそのへんにしたら。ご飯、冷めちゃうでしょう。はい、座って。ほら、お父さんも、真奈美も」

母が私達を笑顔で仲裁すると、皆で食卓に着いて晚ご飯を食べた。

父と私は目を合わせることもなく黙々とご飯を口に運んでいたけれど、母の作る料理はつい気を許すと笑みがこぼれてしまうくらいおいしい。

次の日の午後、私が自分の部屋で夏休みの宿題に取り組んでいると玄関のチャイムが鳴った。

父も母も仕事に出かけていて家の中には私しかいなかったから、仕方なく参考書から顔を上げて部屋を出る。玄関のドアを開けると、一人のスーツ姿の男性が立っていた。

「はじめまして。私、こういう者です」

男性が名刺を差し出す。そこには「化石頭発掘調査会社代表 石渡拓海」と記されていた。

「化石頭発掘調査会社？」

私が首をひねると男性は夏の暑さを感じさせない涼やかな笑みを浮かべて頷く。

「優良な化石頭を見つけ、その発掘調査をするのが我々の仕事です」

「はあ……」

よくわからない私は曖昧に返事をした。化石頭って、私が昨日父と言いつつ争ったときに口を突いて出たデタラメじゃないの？

「ところで、あなたのお父様は実に良い化石頭をお持ちですね」

化石頭に良いとか悪いとかあるの？

男性の瞳が冷たい光を帯びた。

「お父様の化石頭を我々に発掘調査させて頂けませんか？」

どう答えていいか当惑する私に男性は静かに微笑む。

「難しいことは何もありません。ご家族の方に許可を頂くだけでこの契約は成立致しますので。お父様の化石頭をこのまま放置なさっても、あなたにとってはデメリットしかないとお見受けしますが」

「それってつまり、父の化石頭の発掘調査をあなたの会社にお願ひすれば、父の古くさくて頑固な考え方も少しは良くなるってことですか？」

男性は嬉しそうに頷く。

「そのとおりです。頭の中にある古い価値観の象徴である化石が採掘されれば、お父様の考え方もより時代に即したものとなることでしょう」

「では、お願ひします」

私は父の化石頭の発掘を許可した。これで夏休み中、父に邪魔されることなく先輩と好きなだけ長電話ができるなら最高じゃない。

その翌日の朝から父の化石頭に変化が起きた。

どういうことかというど、父の頭の上に作業着姿の小さな人々がたくさん現れてハンマーを振るい始めたのだ。ハンマーのヘッドが父の頭を穿つ瞬間、カチンと小気味よい音が辺りに響く。私は「おはよう」の挨拶もそこそこに食卓を挟んで父の向かいに座ると、ワイシャツ姿で黙々と朝食のオムレツとトーストを食べる父の頭から目が離せなかった。当の父はどんなに頭を掘り返されても痛がるわけでも痒がるわけでもなく平然としている。

「何だ？ 朝っぱらから人の顔をジロジロ見て？ おまえも夏休みだからってダラけた毎日を送ってちゃダメだぞ」

また始まった。私がウンザリしたところで「カチン」と父の化石頭を打つハンマーの音が弾ける。その音は私以外には聞こえないらしく、母は台所で父のお弁当を作り続け、父はフォークを片手にテレビのニュース番組を熱心に見続けていた。

やがて発掘者の一人が小さな歓声をあげると父の頭に開けた穴の中からアンモナイトとおぼしき丸い化石を丁寧に取り出して掲げた。周囲の発掘隊から小さな拍手が起きる。父は自分の頭の上でかなり大胆かつ大規模な発掘作業が繰り広げられていることに全く気づいていない。テレビのニュースなんて見てる場合じゃないのに。

テレビを消すと父は急に朗らかな笑顔を私にむけて、「さて、そろそろ行くとするか」と言って席を立った。それから台所に立つ母からお弁当を受け取ると「いつもおいしい食事をありがとう」と感謝を述べ、鼻歌を歌いながら玄関から外に出て行った。いつもなら眉間にシワを寄せた気難しい顔で出勤する父の変わり様に呆然としてしまった。母も鳩が豆鉄砲を食ったうえに狐につままれたような顔をしている。

これってつまり、頭から化石が採掘されたことで、父の頑なで小うるさい性格が少しだけ改善されたってことなのかしら？

その朝以来、父の頭には何組もの小人の発掘隊がテントを張り、昼夜を問わずカチン、カチンとハンマーを突き立てて次々と化石を掘り出していた。それとともに父の頑固さが少しずつ失われていき、いつしか先輩が何時に家に電話をかけてこようが、私が友達と遊んで門限の七時をどつくに過ぎて帰宅しようが怒ることも説教することもなくなった。しまいには似合わない紳士然とした余裕のある微笑みをその口元にたたえて「真奈美ももう大人なんだから自分の好きにきなさい」などと言いだした。

最初のうちはシメシメとほくそ笑んでいたものの、父のあまりの変化にだんだん不安になってきた。

化石頭発掘調査会社の代表と名乗った男性の名刺を取り出すと、そこに記された電話番号に何度かかけてみたけれど一向に繋がらない。

途方にくれた私は母にすべてを打ち明けた。

すると母は「また昼間に居眠りして夢でも見たんでしよう」と笑って真面目に取り合ってくれない。ひとしきり笑った後で母がふと真顔になって言った。

「お父さんはね、真奈美のことを本当に心配しているのよ。だからつい、あんな風にお節介を焼いたり、お説教をしたりしちゃうの。お母さんもね、お父さんたら過保護というか過干渉なんじゃないかしらって思うこともあるけど、あなたのことを大切に思っているからこそなのよ……だから、わかってあげてね」

愛の反対は憎しみじゃなくて無関心。そんな言葉が脳裏をよぎった。

「じゃあ、お父さんの頭からこれ以上化石が掘り出されたら、私に対する気持ちも一緒に消えちゃうのかな」

母がクスリと笑って、私の顔を覗き込む。

「あら、あんなに煙たがっていたのに、いざ構われなくなるとやっぱり寂しい？」

「そ、そんなこと、あるわけないでしょ」

母が優しく微笑んで私の手を両手で包む。

「大丈夫よ。お父さんの化石頭は筋金入りだから。ちょっとやそつと頭から化石が掘り出されたくらいであの頑固さがなくなるとは思えないもの」

「だよね」

ほっとして笑ってしまう。

「どうしたんですか、お二人とも。楽しそうに笑って」

仕事から帰宅した父が居間に笑顔で入ってきた。その頭の上では相変わらずカチン、カチンとハンマーの音がリズムカルに響いて化石の発掘作業が続けられている。

ネクタイを緩めて食卓に着くと父が小さくため息をつく。

「ああ、お腹が空きました。郁恵さん、夕食をこ用意頂けるとありがたいのですが」

郁恵とは母の名だ。いつもは「郁恵さん」なんて呼んだことないのに。それに口調がいつのまにかすっごく他人行儀になってるし。

「お父さん、あのね……」

父の前に座ると私はその目をまっすぐに見た。

「ええと、ところで、あなたはどちらのお嬢さんでしたっけ？」

父がきよとんと私を見た。

ふざけている様子はない。こういう冗談を言う父ではないと娘の私が一番わかっている。これも現在進行中の化石頭発掘の効果に違いなかった。父の頭の中からは古くさく頑固なこだわりという化石が取り除かれるとともに私の記憶もきれいさっぱり失われてしまったのだ。

呆気にとられていた母が私に目配せする。

「あ、そうだ。お父さん、真奈美が今度、テニス部の先輩と二人きりで泊りがけの旅行に行くんですって。ね、真奈美」

そんな予定はない。困惑して母の顔を見返すと、母がパチパチとウィンクする。その意図を察した私は大げさに頷いて父に言った。

「あつ、そう、そうなんだよね。二人っきりで泊まりがけで。先輩ったら大胆で困っちゃう。ウチはお父さんが反対するから無理だって言ったのにどうしてもって……」

カチンと一際大きなハンマーの音が部屋中に響いた。

次の瞬間、父の頭のとっぺんから勢いよく液体が噴き出し、テーブルを黒く染めた。

「これって、まさか」

テーブルを人差し指で撫でる。ねばつく黒い液体の正体は原油だった。父の化石頭の発掘隊はついに油田を掘り当ててしまったのだ。

「泊りがけの旅行など絶対に許さんぞおっ！」

爆発する父の怒りに呼応して、その頭からマグマのように迸る原油の黒い雨が我が家の床を熱く濡らした。

以来、父の化石頭からはどれほど汲めども尽きることもない家族に対する不器用で頑固な愛情が噴き出し続けている。

まったくもって愛しくも鬱陶しい。